

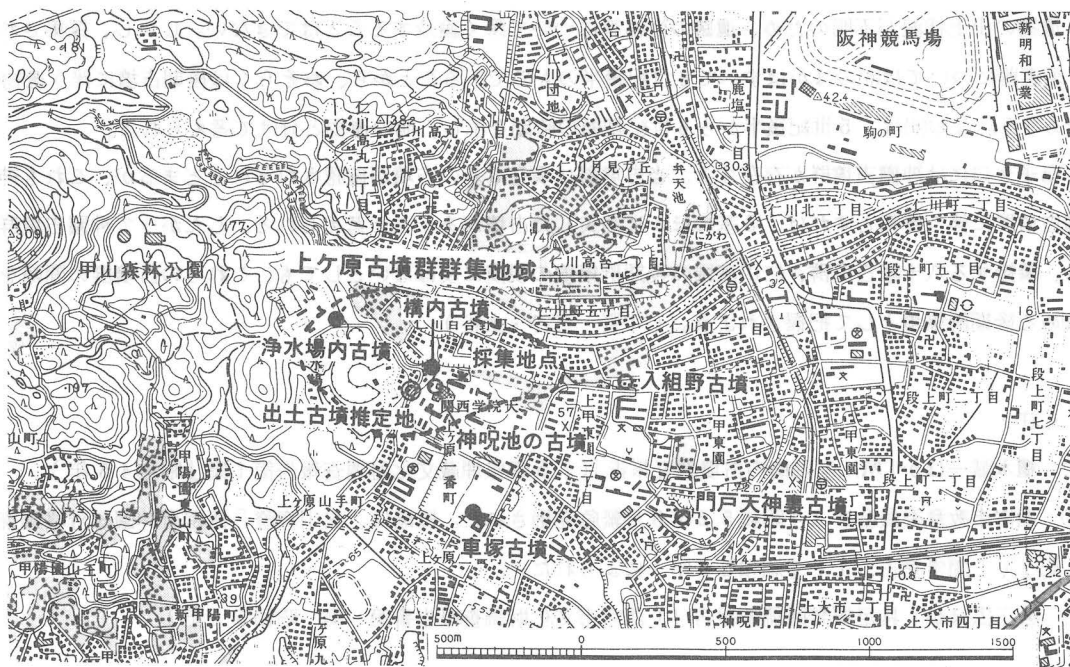
関西学院構内採集の須恵器

関西学院大学考古学研究会

ここで紹介する須恵器は昭和58年11月、筆者が関西学院構内で採集したものである。関西学院は甲山の東麓、上ヶ原台地上の北西部の一面を占め、昭和初年に建設された。かつて上ヶ原一帯には多くの後期古墳が存在したが、現在では関西学院構内古墳と浄水場内古墳の2基が現存するのみである。今回採集された遺物はその意味で上ヶ原古墳群を復原しうる一資料と考えられるのでここに小文を草することにした。

遺物は杯蓋の一部で文学部本館北側の植え込みの根元に散布していた。残存していたのは口縁部から天井部にかけての部分で、全体の約1/5にあたる。復原径12.4cm、残存高2.6cmで、暗灰色を呈する。胎土は精良、焼成は堅緻である。年代は型式編年より6世紀後半に比定できる。

遺物の遺存状況であるが、割れ口がきわめて新しく、かつ鋭くえぐられたような感じで、なんらかの機械力により強力に破砕されたようである。また、遺物に付着していた土は黄褐色砂礫土で、上ヶ原周辺のいわゆる山土であると考えられ、何処よりか搬入されたものであろう。以上の事実からすると、この杯蓋は地中に完形かまたはそれに近い形で埋蔵されていたものが、最近になって造成工事等により偶然に破砕され廃土とともに植え込みに廃棄されたと考えられる。ここで思い当たるふしがあるのはキャンパス内での法学部本館増築である。この建物は鉄筋四階建てで当然地中深く基礎を施している。とすれば、これによ



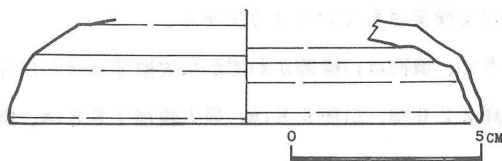
第1図 須恵器彩集地点と出土古墳推定地

って遺物が偶発的に出土したことは充分考えられよう。

少々回りくどく書いたが、結論的に言えば今回法学部の校舎が建設された地点に杯蓋とそれに伴う古墳が完全な形でないにしろ存在していたのである。かつての造成で古墳が埋没してしまったのであろう。

さて、上ヶ原古墳群を含む仁川流域の後期古墳については筆者らが分布状況、形成過程を復元的に考察を加えた（「仁川流域の後期古墳」、『関西学院考古』第3号、昭和51年）。上ヶ原古墳群の群集墳は仁川の谷に傾斜する台地北辺に集中する。したがって今回破壊されたと思われる古墳や神呪池の古墳（『西宮市史』第7巻、昭和34年）は台地上の平坦面に築かれていながらもこれらの古墳に接しており、同一のまとまりとして把握できる。神呪池の古墳は構内古墳の南東約20m（現在は第五別館の周辺）であり、法学部本館はこの地と南接する位置にある。なおキャンパス内に今夏頃より大型の花崗岩石材が数個放置されているが、これらは破壊された古墳の用材とみて大過ないであろう。

以上いくらか推測を加え採集された遺物について述べてきたが、全く古墳が認知されずに消滅したことは遺憾である。確かに『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』（西宮市教育委員会、昭和51年）には構内古墳のほか神呪池の古墳、テニスコートにあった古墳の4基は点として示してある（テニスコートには2基、構内古墳のほかは消滅墳として）。しかしながら、今回紹介したケースのようにかつての造成でもなお完全に古墳を破壊していないことも考えられ、今後充分留意する必要がある。少なくとも関西学院構内は埋蔵文化財包蔵地として認識し、新しい造成等の対策を講じねばならないことを肝に銘じたい。（坂井）



第2図 関西学院構内の須恵器（杯蓋）

関 西 学 院 考 古 既 刊

2号 関西学院構内古墳現状・遺物実測報告（本文32P・図版7葉）

新たに関学構内古墳の実測をし、あわせて未発表であった須恵器・玉類を報告した。

絶版

3号 仁川流域の後期古墳（本文24P・図版13葉） 残部僅少 頒価 ￥700（送料共）

仁川流域に所在する上ヶ原、五ヶ山、五ヶ山西、旭ヶ丘の4古墳群の研究考察。未発掘資料を加えた基礎資料である。 残部僅少 頒価 ￥700（送料共）

4号 長尾山の古墳群Ⅰ、西宮市甲風園の弥生式土器、横穴式石室の平面形について（本文28P・図版17葉） 頒価 ￥700（送料共）

長尾山の古墳群Ⅰは研究史・問題点の提示、中筋山手古墳群についての報告。甲風園の土器は、武庫川西岸の弥生時代前期の資料。また横穴式石室の平面形は漸新な視点からの研究ノートである。